

テンコツさん一家

長谷川時雨

青空文庫

——老母よりの書信——

鼠小僧ねずみこぞうの家は、神田和泉町いずみちようではなく、日本橋区和泉町、人形町通り左側大通りが和泉町で、その手前の小路が三光新道、向側——人形町通りを中にはさんで右側大通りが堺町および、及およびがくや新道、水天宮は明治七、八年から芝三田辺より来られ候。

三光新道が鼠小僧の家、母親と妹がすまってるて、妹には旦那だんながあつて、その旦那の来てゐる時は、表のこうし戸の前に万年草の植木鉢が出てある。鼠小僧は小がらな、うすあばたのある、ちいさなよき男のよし、その母は引廻しの日にとうといお寺へ参つて坊さんになつたさうです。祖母おばあさんの若いころには堺町に芝居が三座あり、その外人形座もあり、かげま茶屋といふものもあつたよしに候。

私は微笑した。こんなつまらない事ではあるが、他人のいった事が正しいような気がして無意識に従うことがある。実は、前章の末に書いた鼠小僧のくだんの中に、神田和泉町

と書いたのは何処かに目に残っていた文字をそのまま書いてしまったのだった。講釈本からも知れない。あるいは戯曲の台本などからも知れない。

和泉橋は今でも神田と下谷したやにかけてかかっている。和泉町といえば神田の方がゴロがよい、というわけでもあるまいが、日本橋区内の和泉町は知る人がすけない。そこで、ちつとばかり古い事を並べて見ると、本編最初からお馴染なじみになっていいる大門通りは、廓くるわの大門の通りなのだから大門おおもんとよんでください。芝にも大門があるがあれは大門だいもんである。

日本の首都である東京の日本橋の中央の大問屋町が、遊女屋町吉原の大門通りであつて、堺町、和泉町、浪花町なにわちよう、住吉町、大坂町でとんで伊勢町など、みんな関西から出稼ぎ——遊女屋の出身地だとばかりはいわれまいが——人の地名から来ている。長谷川町は大和からの名であろうが、其処そこには長谷川という大きな木綿問屋が現今いまでももある。

葭町よしちようを廓の中心地とすると、人形町の名がどうやらわかつてくる。人形屋もありはあつたが、室町十軒店むろまちじっけんだなの方が有名でもあり、数も多い。ここの人形商はおやま商業あきないであつたことがわかる。親父橋おやじばしが渡して廓がよいに不便だろうと、遊女屋側からかけたので、遊人それを徳とし、その特志家を——実は商業上手を、おやじおやじと尊称した名が残つたのであると記録にもある。このよし原が浅草田圃たんぼに移され、新吉原となつてから

でも、享樂地としては人形町通りを境にして親父橋寄りに、葭町、堺町、葺屋町側に三座の櫓があり、かげま茶屋、色子、比丘尼が繁昌した。今では反対の側の住吉町、浪花町の方に芸妓屋がのこり、明治の末大正にかけて、かきながら町に私娼、大正芸妓があつた。新吉原は浅草公園を外苑地帯として根を張り、あとから移転していった芝居——山之宿の市村座、鳥越の中村座など、激しい時代転歩にサツサと押流され、昔日の夢のあとには失なつてしまつたが、堺町、葺屋町の江戸三座が、新吉原附近に移るには間があつた。古い廓のロマンスというやうなものが残つていたかというところ、私が知っているのは禿が池というのが大門通りの突当り、住吉町の地尻りにあつた。今でも何か神社が残つていゝであらうが、かなり広い池をもつた社で神樂堂が池の中にあつた。昔日はもつともつと大きな池だつたときいていたが、埋立られて、清元家内太夫の家や、芸妓屋や、お妾さんの家がギツシリと建つてしまつた。向側に粹なうなぎやがあつたが、そうなつては掛行燈の風致もなにもなくなつてしまつた。この池に悲しい禿が沈んだのだということが子供心を湿らせたに過ぎない。

テンコツさん一家に対して、あまり長い前置詞であるが、この池尻りの向う一帯が、松島町という細民の部落で、その附近にこの一家が散在していたからだ。

とはいえ、私は松島町の姿を多くは知らない。よく見ておくべきだったが、子供心にはそんな欲心がない。中島座という小芝居が非常に繁昌した——それも目で見たより、家の人がいうのが耳に残っていた方がかっている。

テンコツさん森口嘉造氏はそこら一帯の大屋さんで、口利きで、対談事、訴訟にもおくれをとらぬ人、故松助演じるころの『梅雨小袖』の白木屋お駒の髪結新三をとつちめる大屋さん、鯉は片身もらつてゆくよの型で、もちつとゴツクした、ガツチリした才槌頭である。テンコツさんのいわれは知らない。一度何のことかと父に訊いたら、拳固をかためて頭のところへもつていったようなことをしたが、私にはなんのことなのか分つたようで訊らなかつた。たぶん、頭がかたい——頑迷だということのかも知れない。母にきいたら、頭の脳天に丁字鬚をのせていたのだともいった。

テンコツさんの住居は、中島座の通りで、露路にはいった突当りだった。露路口に総後架の扉のような粗末な木戸があつた。入口に三間間口位な猿小屋があつた。大猿小猿が幾段かにつながれていて、おかみさんが忙しなく食もの世話をしていた。人参やお芋を見物のやる棒のついた板の上に運んでいた。私ははじめ猿芝居かと思つていたがそうで

はなく、といつて、見物に小銭で食物をやらせるのばかりが商業でなく、猿を買出しにくる人もあつたかも知れないが、貸猿がおもなのだから、猿廻しの問屋とでもいっいたらよいかもしれない。

ざわざわと人の多い、至るところ細い道だった。毎年冬になると鯨の味噌漬の樽がテニコツさんからの到来ものだった。大橋の下へ船がついたからとりについてくれといつてよこした。で、このせまい町から、ある年の冬火事をだしたおり、荷物は大橋から船へ積みと手伝いにゆく者たちはいつていた。

その時の火事は大きかった。江戸時代の残物で、日本橋区内のコブであつた汚ない町が一掃されたが、哀れな焼け出されも沢山あつた。一度眠つた私の家が叩き起された時は、大門通り一ぱい火の子がかぶつていた。家々では大提燈を出して店の灯を明るくした。酒屋はせわしげで、蕎麦屋は火をおこし、おでんの屋台はさかんに湯気をたてた。纏がる、梯子がつづく、各組の火消が提燈をふりかざして続いてくる。見舞人が飛ぶ。とても大通りは通られはしない。

子供たちは角に立つて、ガクガクして飛んできておちくだける火の子の華を眺めていた。火喰鳥が空をまわつてからこの火事は大きくなるなどろくな事はいわなかつた。で

なくてもこの火事はあるべきものとしてこの近辺の者には予想されていたのだった。松島町の方に火柱がたつということは毎夜噂うわさされていた。祖母をさすりに毎晩交替でくる、栄良だの栄信だのという小あんまたちまでが、自分たちも見たように咄はなすのだった。私たちも怖こわ々夜更けに出て見たことがある。そういえば気のせいか、下の方は見えないで、一抱え以上もある火気が——丸い柱が、ポツと立っているように思えたのだった。

書生たちは早くからあつまってきた。河岸かしを廻かって細川様（浜町清正公様）のさきから、火事場の裏からでなければいれまいと父も洋服を着て出ていった（その前までは刺さつ子を着るのだった）。火事場の中には、テンコツさん一家の一人に、肺病で寝ている、来春大学を出る法律書生の、父のたつた一人の甥おいもいたから、家のものは案じきっていた。

と、大通りの勢いのよい人たちに突きのめされながら、薄いきもの一枚で、葛籠つづらを肩にした青い少年がフラフラと現われた。待ちには待っていたが、手厚く連れてこられるものとして待ちかまえていた女たちはそれを見ると戦慄ふるえた。長なが病わづらいの少年が——火葬場の薬までもらおうというものが、この夜寒に、——しかも重い病人に、荷物をもたせて、綿のはいったものもきせずに——

母は一人子ひとり一人なのに——なにがほしいんだ、祖母はグツと胸に來たらしかった。全然

肌合はだあいのちがう嫁ではあるが——祖母には、その少年がたった一人の男の孫であり、その子の母親は私の父の兄の後妻であった。父の兄は維新後の世の中のゴタゴタのころ、懐に金を入れて出たまま行衛ゆくえ不明になつて、幼子と後妻だけが残つたのを、家を売つた金や残りのものと一緒に実家さとかたの兄、テンコツさんの近くへいつていた。

少年は暖かい床に入れられ、私の母に静かにさすられていた。祖母はやがて帰ってくる、自分の子でも私の父には、少年が背負されて来た葛籠は見せたくなかつた。

「おやそ、こんな葛籠はなぜ焼いてしまわなかつた。お前はなぜ猪いの之をおぶつてすぐに来なかつた。」

と、少年の母が来るとすぐ祖母は激しくいった。だが、いかにも後家相ごけそうをした、色の黒い、小欲で眼の光っている、瘦やせた長顔の、綿入れを三枚重ねて着て、もてるだけの荷物の包を両手にさげて、転がったら最後焼け死んでしまいそうなたちしたおやそさんは、いまや息子のことよりは荷物だつた。

「葛籠はまいましたか？」
と洒然けろりとして訊たずねた。

哀れな少年猪之さんは寒夜の火事と、重い葛籠が災いして死んでしまった。

テンコツさんは大屋さんから立派な家主さんに代った。人形町通りも半分焼けたので銀座に似た煉瓦建れんがだてになった。その幾軒かはテンコツさんの持家であつた。住居も紳士風にした。石のような羊糞ようかんを紙に包んでくれなくなった。

大きな納屋なや——物置きが母屋から離れたところに出来たと思つたらその隅に床をつくり、畳を二畳ばかり敷いておやそさんのいるところが出来た。沢庵たくあん桶おけや漬け菜との同居である。あんまりの事に、こんどは私の母が不服だつた。

「家からの仕送りが毎月行くのに、まるで……」

そんな年齢でもなかつたであろうに、おやそさんは鼠ねずみの骨のようにほしかたまつていた。でも何かあると、例の葛籠の中に焼けのこつた裾模様の派手なのを着てくるのではたのもの方が困つていた。彼女の嫁入り衣いしやう裳しょうなのだから、いかに黒の紋附でも悲惨だつた。

おやそさんは忠実に雇われてきた。夜でも急用があるといえば、巾はばの広い木綿きんちやくの前の掛けをかけて、提灯ちやうちんをさげて、林歯ほうばをならして、謹つつましやかに通つてきた。袋物商の娘だつたので、袋ものをキッチンとつくつた。私たちのお弁当箱の袋や、祖母の巾きんちやくを着ある気に入るようにつくりあげた。或日ある、そのおやそさんが、クドクド祖母や母を説いていた結

果が、六つの年からあがった長唄の師匠をとりかえられる事になった。おやそさんの姪めいが、杵屋勝梅きねやという名取りになったが、まだよい弟子がないのだというのだ。

私の長唄のおしよさん六喜美さんは、眼玉にホク口のあるような目で、背中が丸くて、猫がコウバコをつくったようなお婆さんだったが、後取りあととにする内弟子のふうちゃんより、名取りのおなつちゃんより私を可愛がって、御自慢で附合さ俊らいに連れ廻った。鉄砲町の百瀬もせという接骨医の裏にいたが、半片はんぺんを三角にきつて煮附につけたお菜をわけてくれて、絵硝ガラス子のはまった行燈あんどんのわきで一緒に御膳をたべさせるのを楽しみにしていた。お俊いのは、二間の戸棚を開けはなし、中央まんなかの柱を上だけぬいて山台やまだいにする。十銭札や二十銭札——この間中あつたのとは違った——が廃やめられる時、戸棚の方へむかつて、そつと勘定していたが、部厚なのを見せて、誰にもいつてはいけないよといった。大きな、どてらを着ていた背中を忘れない。その親しみのある人から離そうというのだから、私は厭いやだといった。では、どつちのおしよさんにもやらないと母は叱った。

浪花町なにわの裏にいた勝梅さんも、焼け出された一家だから、三味線よりほかなんにも持つてなかつた。兄さんは叔母おばのおやそさんそつくりの人で、肺病かもしれなかつた。だんま

りで袋物の細工をして、時折トントンと小さい木槌きうちの音をたてるばかりだった。母親がおやそさんやテンコツさんの姉さんで、額の大きい、落ちくぼんだ大きな眼——この人は美人だったと思われたが、しどくしどく貧乏にやつれて、骸がいこつ骨こつみたいな顔をしていた。おきみさんという娘は父親似で、大きなふくくりした顔と、フンダンな髪の毛をもっていたが、人がよすぎてポンとしていた。父親の善兵衛さんは、名の通りの人物で、今なら差当り、クラシカルなモデルにでも役にたとうが、そのころでは高い鼻と豊ほうきよう頬ほとのもちぐさりで、水鼻をたらし、水天宮様のお札を製造する内職よりほか仕事がなかった。

「六喜美さんは好いお弟子が沢山あるけれど、勝梅さんはお前がいかないと困るのだから」。

と説きおとされて厭々通うことになった。最初は何も教えてはくれなかった。毎日一、二段さんずつお浚さらいのように唄うたわされた。まあ、助六を知っていますか？ ではそれを——勧かんじ進しん帳ちやうも？ 牛若も？ まあ、あれも？ これも？ いい声だいい声だとそやされて無中になつて唄つた。しまいには、兄さんが体がわるいので気むずかしいが、やつちやんの唄をきくと大層よろこぶからと——これは体ていのよいおとりで、窓はいつもあけはなち簾すだれだけにしてあつたから人だかりがした。そのうちポツポツお弟子が出来てきた。

お弟子の種類が所がらで面白い、水天宮様のおきよめ——門前で五の日五の日に、神前へそなえる小さいお供餅そなえもちを細い白紙でちよいと結んで売る商売、中には売色で名高い女もあつた。年増としまの芸妓の手ほどきなどで、そのうち裏から表通りへ越すようになった。階下したが住居で二階が稽古場、壁が汚きたないので古新聞を一ぱいに善兵衛おじいさんが張つてくれた。勝梅さんは色白の毛の薄い大あばたで、眼が見えないから、壁の汚きたないのは平氣だが、子供のくせに潔癖性で、氣味悪げに私が見廻すので、来なくなるといけないからと、大ふんばつで張つてくれたのだった。

三味線が二張に見台けんだい。そのほかは壁の隅に天理王を祭つた白木の小机があるだけ。私はお稽古を待つているうち中、うらさびしさにボンヤリしていた。六喜美さんのところは上り口に赤い鼻緒のポックリが足も入れられないほど並んで、入口の三畳でふうちゃんが下ざらいをしているし、八畳の隅でなっちゃんが出来ない子に撥ばちをもってやって教えているし、おしよさんの前にはあとからあとからとおじぎをして出てゆくし、私は縁側で、千なりほおずきをとつたり、石菖せきしょうに水をやつたりして怒られたり褒められたり、お手だまをとつたり、みんなで鞠まりをかがつたり、千代紙で畳んだ香箱へ、唄の出来ないところへ貼はりつける細かい紙を刻んだり、おちぢれをこしらえたり、お三宝だの菊皿だのと、時間

なんて気にもしなかったのに——だが、古新聞はそれらにました悦びよろこを与えた。あたしは善兵衛さんに手伝つて、いつになく機嫌よく壁張りの手伝いや見物や助言をした。それは逆さまだ、こつちの面ほうへ糊のりをつけた方がよいのと。

古新聞が壁にはられてからあたしはせつせと稽古に通うようになった。番がきてもなかなか座らない。おまけにお弟子がすけないからいつも私の番がすぐにある。私は這入はいつてゆくにも足音を忍ばせて、こんちとも言わないで壁にゆく。勝梅さんは内職の毛糸の編物あみものをしているが、勘のよい盲目めくらさんで、ニヤニヤ笑いながらいった。

「おやつちゃん、はじめましょう。」

あたしの背の——目のとどくところのうちは無事だったが、とうとう天理様の机がもちだされることになった。それでたりずに見台まで、鼠がひくようにひっぱった。勝梅さんが不思議がつて探り廻びっくりしだしたのに吃驚びっくりした私は二ツ重ねた足台からおっこつて、階下の人を驚かせ、二階へ駈上かけらせた。勿体もったいないといつて盲目さんは泣いた。階下からは兄さんが、かわりの読物をかしてくれた。たしか『都の花』という新聞の附録だったが、苦しい生活を知らないあたしは遠慮もなく頁をあわせて立ちきってしまったので、コチコチの兄さんが疔癬かんしやく玉を破裂させて梯子段はしごだんからどなり上つて来た。だが、何が彼をそん

なに怒らせたのか分らなかつた。

『都の花』は近所からの借ものだつたのだ。あたしはまた高いところの古新聞を読んだ。
 厠かわやのはどうにもならないが、梯子段の近辺は手すりにのぼつた。窓の近くは窓にのぼり、
 欄間に手をかけて屋守やもりの這うかたちでした。向側のキリ昆布屋から危なくて見ていられない
 いと苦情を申込んで来たので、また兄貴どなが吠鳴どなつた。翌日ゆくと、善兵衛おじいさんが股また
 の間へ摺鉢すりばちを入れて、赤っぽい大きなお団子だんごをゴロゴロやっているので、摺鉢をおさえ
 てやりながら、なににするのだときくと、ただニヤニヤ笑っていたが、やがて、古新聞が
 お団子色にぬりたてられた。

兄さんが死んで、おきねさんが三ツ輪に結つて、浅黄がのこをかけてお齒黒をつけて、
 どこかみだらな顔つきになつたが、それも見えなくなつた。骸骨がいこつの顔に大きな即効紙を
 張つたお婆あさんも死んだ、善兵衛さんはどうしたのか、勝梅さんは天理教をやめて耶蘇ヤソ
 になつたといつた。外国婦人につれられて歩いているのを見かけたといつたものもある。
 おやそさんに、も一人の姉さんがあつた。やつぱり近所に住んでいたが、みんな後家ごけさ
 ん——後家さんはお母つかさん一人で、あとは老嬢おうるどみすだつたのかも知れないが、女ばかり四よ

人ひとりしてキッチンと住んでいた。母子おやこなのだか姉妹なのだかアンポンタンにはわからないほど、梯子段はしごだんのようにだんだん年をとった四人だった。一番若い下の娘だけが廿二、三でもあつたのだろうが、一体に黒つぽいおつくりの時代で、ことにテンコツさん一家だから花の香はなかつた。大きいおうるとみすがおとよさんといつて学校の先生だった。中ちゆうぐ位らいのおうるとみすも教師だった。下のミスも先生になりかけていた。お母さんだけが台所をしていた。この女ばかりの家は用心堅固で、貧乏が入りこまないようにしていた。大きいミスの名が通りものになつて、おとよさんの家と呼んでいた。

善兵衛がおひとよしだから姉さんはあるなになつてしまつてと、おやそさんは言つたが、勝梅さんのお母さんつかよりおやそさんの方がよつほど貧乏性だった。

おやそさんは、あたしの祖母がなくなつたとき、寐棺ねがんが来たら蓋ふたをとつて見て、

「まあ結構な——どれまあ。ちよいとお初はつに入れて見せて頂いて——どんな具合だかおあんばいを」

と中にはいつて横ねてに寐ねてて言つた。

「なんて楽なことで御座ございましょう。お布団はふくふくして、なんとももうされないよい

気持ちで御座います。おばあ様にあやかりまして、私も極楽おうじょう往むかひ生なまいたしますように。」
なまいだ、なまいだ、なまいだ、と棺から出てきても空念そらねんぶつ仏を言いつづけていた。

おやささんが、漬物つけもの桶おけと同居して死んだ時、十本の指に十本、手首にも結びつけていた紐ひもがある。その紐はみんな寐床の下から出ていた。死体を棺に入れたら床の下からずるずると幾つもの巾きんちやく着ぎが引きずられて畳はを這はった。貸金の証文、鍵類かぎ、お札の入れたの、銀貨の入れたの、銅貨の入れたの、穴のあいたビタ銭のまであった。大概のものは棺の中へ一所に入れて、現金は何処どこへか寄附された。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

※「老母よりの書信」は旧仮名遣いになっていますが、ルビにつきましては、岩波文庫編集部の方針「現代仮名づかいで振り仮名を付す」に従い「いずみちよう」としました。

入力：門田裕志

校正：小林繁雄

2003年7月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

テンコツさん一家

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>